

～欣浄寺法語メール～2016年10月～

阿弥陀さまの願いに「わたしの国に生まれた全ての者を金色に輝く身としよう」（48願中第3番目の願い）とあります。

先年祖母の五十回忌のことです。従兄弟が祖母はいくつだったと聞くので「満で68才だった」と答えると「えっ・・・もっと年を取っていたように見えたが」と絶句しました。当時私は小学生でしたが、思い返しても祖母の晩年の姿は、現代の60才なかば過ぎと較べることができないほどの老け込みようでした。続けて私が「おじいさんは34才だった」と祖父の行年を伝えると、誰かが「おばあさんは連れ合いのちょうど倍の年齢、考えてみればしわくちゃになった妻を迎えておじいさんもびっくりしただらうね」と冗談交じりに

言うと同大笑いになりました。

故人の写真である遺影をお仏壇の中には飾らないものだといわれます。心情としてはおかしいと思われるかもしれませんが、しわくちゃだったおばあちゃんも青年の面影しか残さなかった祖父も、お浄土で全身が金色の身となって輝いているのです。ですからお仏壇の阿弥陀さまのお姿を「写真でしか知らないおじいさん、そして懐かしい祖母」と拝んでいるのです。思い出としての写真はお仏壇近くに、そして2年前亡くなった父の写真は祖父母の隣と、もう一つは母のベッドのかたわらに置かれています。